



川からの絵葉書・64

水まかし

池内紀

新幹線米原駅で北陸線に乗り換え。いつもながら在来線に移るとホッとす。スピードが人間の生理に合っているのかもしれない。外の景色がやさしく見えてくる。乗っている人の顔もおだやかで、なぜか急に空腹を覚えたりするものだ。
木之本地蔵を訪ねるつもり。ついでに湖北にちらばっているお寺をいくつかまわってこよう。旧北国街道を歩い

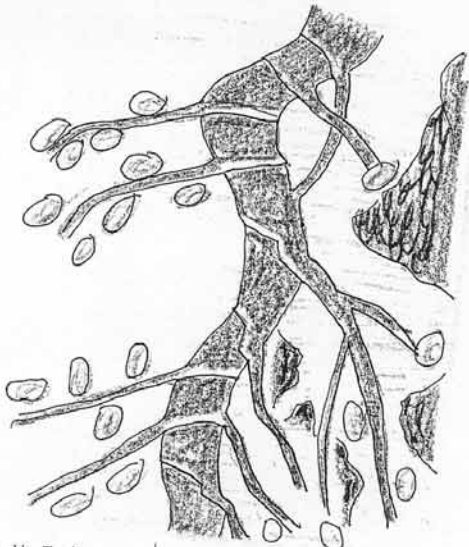
が、しかし、かたにはやはり見えている。カミノリで切ったような水面がどこまでもつづいている。
ひらたいようなが、かなりの高度差で湖へ下っているのがわかった。姉川がつくった扇状地にちがいない。地図でたしかめると、たしかに河口が突き出ている。湖北一帯がいびつな三角状をしている。北からの高時川と、東からの草野川が合わさって姉川になる。河口近くに「落合」の地名があるところ、そこで一つになる。扇状地がタテに長い三角なのは、二つの川がこもこも土を運んできたからだろう。
「水田の水はどうしたのか？」
木之本地蔵よりも、そちらが気になってきた。扇状地はいつも水に苦しむ。地下に水脈があっても、地表にはのぼって来ない。川はきままって川床が高く、くり返し氾濫を起して来た。
木之本駅から地蔵堂に向かう道すじに「きのもと情報館」があった。名前前はものしいが、廃業した店を利用しているらしい。そのとてつなく、威厳のある老体が古ぼけた机に向かい、老眼鏡をすらすらして新聞をひろげている。八の字の長寿眉が福々しい。
先ほどの疑問を口にすると、「おやつ」といった顔になった。「口もてムズムズしている。指先を頬にあてて思案げな顔つき。話したいことがどつと

でもいい。宿はなんとかなるだろう。長浜までは琵琶湖がすぐそばだった。やがて湖面が遠ざかって虎姫から高月。いかにも肥沃そうな田がつづく。そこを姉川が流れている。こんなのにんびりとした風土のなかで、かつて「姉川の合戦」が演じられたわけだ。
ボンヤリとそんなことを思っている。ふと気がついた。湖は遠ざかった

りあるが、さて何からいくか迷っている。そんな悪行を。なにげなく立ち寄ったところで長話をされ、閉口したことがある。
木之本地蔵院の山一つ向こうを高時川が流れている。橋の一つを井明神橋というが、近くに「頭首工」と呼ばれている井堰があるそうだ。戦前からあったものを昭和四十年代に改修した。その前はでんでんばらばらで、いくつもの堰が、それぞれが村々に水を引いていた。一つの川の水を取りこずるので争いがたえない。
「井落」として申しました。井戸の井に落とすとは落語のラクの字です」
長寿眉のかたは、元中学の校長先生で、そのせいか発音明瞭。一語ごとに自分の掌に字をなぞってください。
日照りがつづく。とりわけ下流が干上がってくる。そんなときは井落としました。上流の堰を切ってもいい。
「水まかし」とも言った。
「カケゴシのときの約束ですネ」
「カケゴシ？」
「カケは滋賀県の黒の旧字、ゴシは山越しのゴシ」
そう言われても、すぐにはわからない。こちらで掌に「懸越し」となぞってみた。すである堰の上流に新しく堰をつくるのを、こう言った。下流側がそれを認めるかわりに、干ばつのと

【福川】
滋賀県北部を流れる一級河川。伊吹山地の新地山付近に源を発し、伊吹山の西麓を南流したち西へ方向を変え、草野川、高時川の支流を合わせて琵琶湖の北東岸に注ぐ。流域一帯は姉川古戦場をはじめ歴史・文化遺産が数多く残っている。

水まかし
水まかし
水まかし
水まかし
水まかし
水まかし
水まかし
水まかし
水まかし
水まかし



きは上の堰を切ってもいい。それが「水まかし」。
なるほど、うまい言い方だ。懸越しの例は全国に数多くあるが、「水まかし」の制度は珍しい。湖北のこの辺りだけだという。扇状地であって水を分

前の通りを親子づれやホイイスカウトのような制服を着た少年たちが通っている。地蔵院と古寺巡りをどうしたのか。元校長先生に挨拶もせずに立ち去るわけにもいかない。多少ともじれてきた。
「ありました、ありました」

布張りの大判の本をかかえてもどつてこれた。「湖北農業水利事業誌」と金文字が捺してある。グラビアに古い写真が収められていた。昭和初期のものだという。

堰を切るにあたり、こまかいきまりがあったのだろう。日吉神社の鐘が合図。村々の総代が立ち合いになる。写真による。総代は頭には陣笠をのせ、紋付羽織、うしろにつづく人々は白袷束に白袴巻。出陣の意味で、水杯を交した。

け合にあたり、きつと人々が知恵をしぼったのだ。
「そうそう、いいものがある」
急ぎ足で出ていった。あとほんんとして、驛の時計の音がひびいてきた。それでわかづたが、いつのまにやら小一時間もすわっている。

簪落とし、必要に応じて行う時落しと四種があった。道具は一切用いない。すべて素手で井を引き抜く。泥にまみ

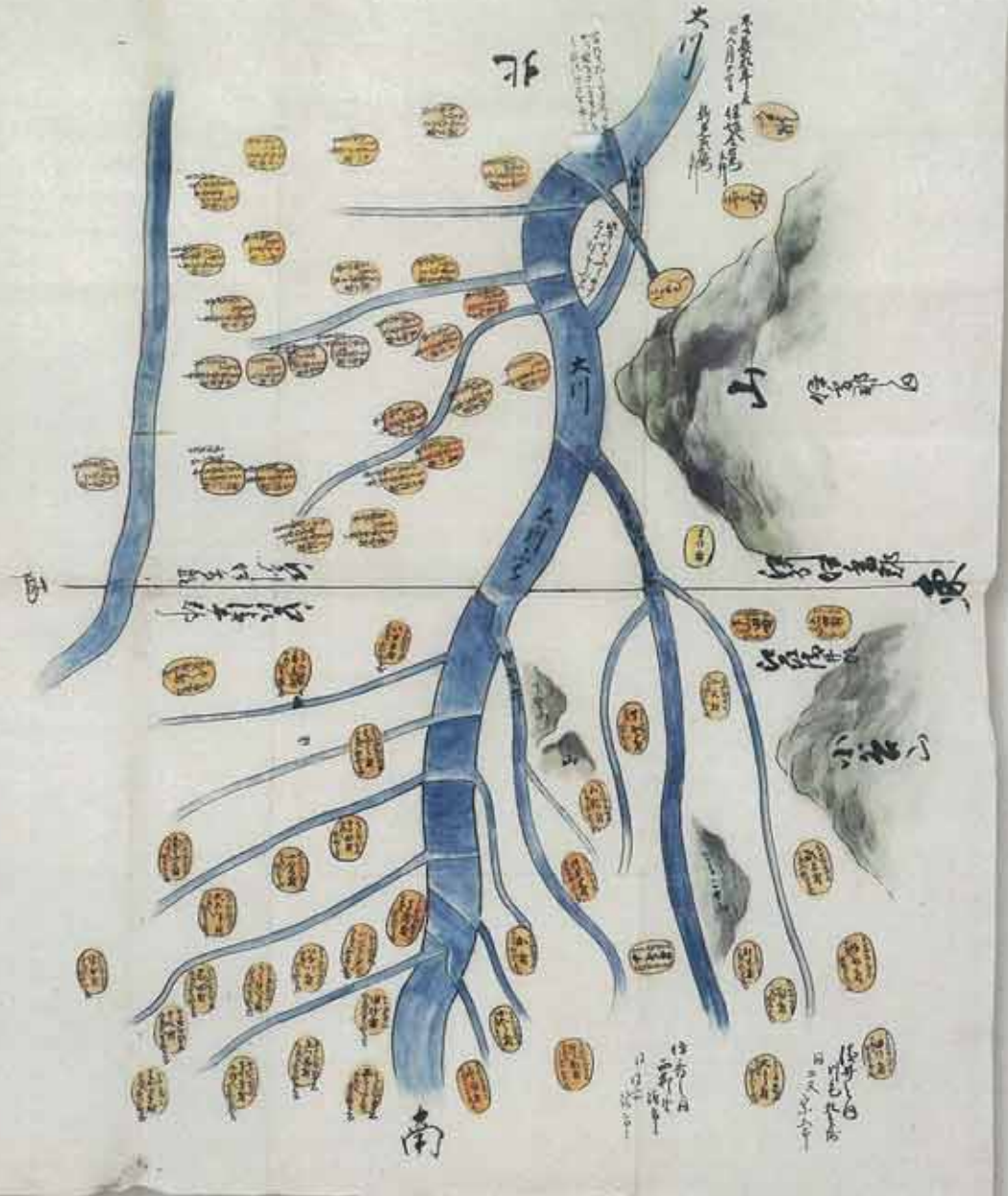
れた隊列が写っていた。
「もどりはギューホです」
「ギューホ？」
「牛の歩みと書きます。むかし国会でよくやりましたでしよう」
これも約束の一つ。隊列の姿が見えなくなると、上流の者は井堰をもとにもどしてもいい。となると少しでも多くの水を流すためには、まさしく牛の歩みが必要だ。国会の牛歩戦術は、たいていメンツづくめのジェスチャーにすぎないが、「水まかし」の牛歩は、折るようになって念じての歩みだった。「井落とし」のあとには、スローモーション映画を見るような不思議な光景が展開された。
地蔵院を訪ねたあと、裏山づたいに高時川まで歩いていった。町会の掲示板に「湖北土地改良区」「高時川治水対策促進協議会」のお知らせが見えた。「高時川の明日を考える住民大会」というのが開かれたとか。
目の底に白袷束、白袴巻の隊列が残っていた。道に迷いかけたので元校長先生からもらった手書きの地図を取り出した。井明神橋の上流には川合や古橋。下流には落川、河毛といった地名が見える。古寺巡りはやめにしてこちらの水脈をたどることにした。地図の紙は、役場の古封筒を裏返しにして利用したもので、少しゴツついた紙から、かすかに香ばしい墨の匂いがした。

「せせらぎ長者」の民話が物語る 「井落とし」の誕生

湖北を代表する民話の二つに「せせらぎ長者」があります。有名な民話ですが、その背景には湖北の水事情を象徴する出来事がありました。地元の歴史に詳しく、滋賀民俗学会会員で高月町社会教育委員・滋賀県文化財保護指導委員の高月町井口の高橋正泉さんにお話をうかがいました。

今から500年も前のこと、富水の庄に城を構え高時川の水利を支配していた井口弾正は、村々の田圃がカラカラに乾き稲が今にも枯れてしまいそうな様子に、「今年もまた米の取れない日照りがやってくるのか」と村役人を集め悩んでおりました。その上、自分が仕立てている殿様・浅井久政（*1）から難題を申し込まれて困り切っていました。隣の浅井郡にあった小谷城の周りの村々の田に水を引くために、高時川の一番上流、古橋のあたりに井（*2）をたてさせてやってみようというものでした。もしそうなら、今でも水が足りず充分に米がとれないのに、さらに井をたてて水をとられてしまうことになるのです。その話を聞いた地元の農民は「わしらの田んぼどうしてくれんだ」と大騒ぎをしました。そこで、弾正は殿様が承知するはずのない無理な注文を出してあきらめず、もたらおうとしました。「片目の馬千駄に、餅千駄、綾千駄、餅千駄（*3）積んでもつて来たら、たてさせよう」と、弾正はできる限りの苦言を、このことを確信しながら注文を出したのでした。ところが、浅井郡中野村の「せせらぎ長者」が、ありったけのお金を全部投げ出して要求の品を届けさせたのです。「この勝負、おれの負けだ」。農民たちも「せせらぎ長者が村のために必死になって整えた尊い贈り物だ。井をたてられても仕方ない」と納得しました。以来、この井のことを餅之井と呼び、昭和の初めまでその権利が守られました。

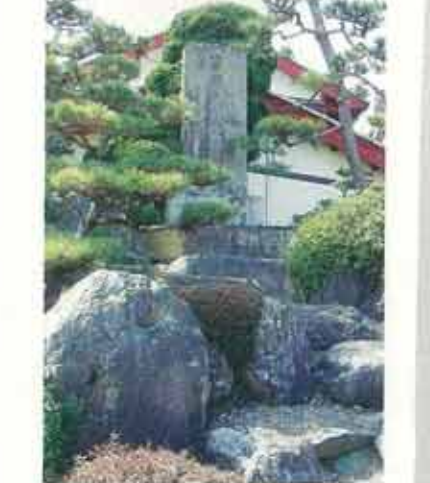
以上が民話「世々聞長者」の概略です。このように、せせらぎ長者の努力により餅之井と高時川沿いの水路が繋がり、下流の小谷城の周りの田に水が引けるようになりました。農民を納得させるための作話の可能性も「この民話はある程度史実に基づいたものですが、全てが史実かどうかには問題があります」と高橋さんは言います。というのも、慶長6年（1601年）の古文書「御裁許之記」に「せせらぎ長者を遣わし、餅千反、綾千駄、餅千駄を送り水迄われ候事と聞伝え候えども、その三千駄の品も確かに見た人もなく、積み送りたるばかりにて、一夜の間に雪の如く消え失せたる事と申し伝える」とあるように、せせらぎ長者が要求の品を届けていない旨が書いてあるからです。「井口弾正にしてみれば、殿様に逆らうのははばかられるものの、簡単に要求をのんでしまえば農民たちの反発が予想されます。領民と権力者の間に立つて苦慮した結果、こうしたエピソードを伝えて農民たちを納得させようとしたのではないのでしょうか。長者の子孫を重く用いたり、石碑を建てて顕彰したなどの事実が一切ないことから、そう思われます。つまり、殿様の要求を受け入れたことを合法化するために作ったエピソードだった可能性があるので」（高橋さん）



▲高時川水系図 慶長九年（1604年）高月町高月区所有。高時川（大川）から多くの井によって用水を取っていたことがうかがわれます。



▲高時川開削工 井明神橋付近には、下流の村々の井塚が8つ集中して見られます。昭和17年（1942年）に、それらを一つにまとめた合同井塚が完成し、現在の高時川開削工は昭和43年（1968年）に完成しました。



▲世々聞長者の顕彰碑 明治25年、虎塚町中野に建立されました。そこは長者の屋敷跡とも言われています。



たかひし まさかみ 高橋 正泉さん 昭和9年、高月町井口生まれ

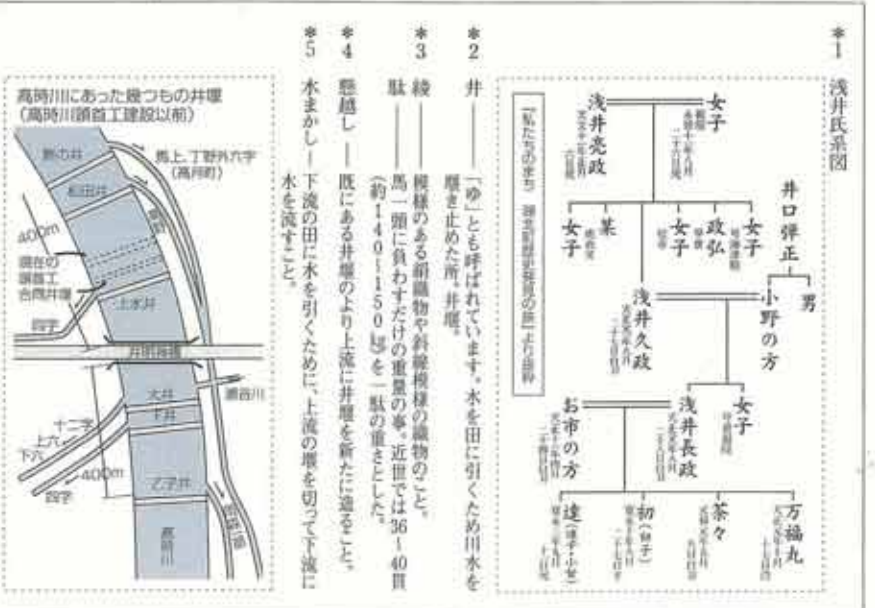
昭和初期の「井落とし」の様子



▲井落としから引きあげる様子 各村の役人が取付羽織に降笠姿で先陣に立ち、白装束白鉢巻の農民がそれに続きました。



▲井落とし 「井落とし」は餅落とし、綾落とし、茶落としと、必要な時に行う時落としがあり、また用具を一切用いず、総て素手で井を引き抜き水を下流に流しました。



わが国水利史上希有の制度「井落とし」 「この民話が仮に史実ではなかったとしても、値打ちが下がるものではありません。それどころか、わが国の水利史上極めて貴重なものです。下流の農民のために井を「懸越し（*4）」させた代わりに、苦肉の策の妥協案として、この井は干ばつときは井落としをしてもよい（切ってもよい）「水まかし（*5）」の権利が生まれたからです。全国的に見て懸越しの例は数多くありますが、水まかしの例は見当たらず、わが国でも珍しい制度です。この民話はその制度発祥の背景を表現しており、後年の「餅之井の井落とし」のルーツともなる貴重な存在だと思えます。餅之井の井落としは、水まかしの行事であり、餅之井を落とす、川に水を通し餅之井の下流の井塚で取水し、中流の田に給水しました。井落としの際には白装束に身を固めて水杯を交わし、日吉神社の鐘が乱打される音を合図に出かけました。行きは急ぎ足ですが、戻る時は牛歩。隊列の姿が見えなくなると井を元に戻してよいとの定めがあり、少しでもたくさん水を下流に流したいと願ったからです。扇状地を流れる天井川・高時川下流の厳しい水事情を物語るエピソードです。「湧水の如くに使う」という言葉があるように、日本は水が豊かだとされてきました。でも、湖北では昔から「松の葉のしすくまで大事にせよ」と教えられたように、水をとても大切にしてきました。「せせらぎ長者」の民話は、そうした湖北の先人たちの思いが結晶したものだと言えるでしょう。この思いは今も変わりません。しかし、「昭和10年ごろからブナ林の伐採が進んで山の保水性が失われ」（地元古老の話）、地球規模の気候変化もあってか、高時川の流量は減ってきています。降雨による濁水や瀬切れも増えました。耕地面積の増加に対応して、農業の形や水利用合理化施策も実施されていますが、先人以上に水を大切にすることに迫られているのです。